

「.....挿れてほしいの？」

耳元で囁かれたその声だけで、優香の膝がかくりと落ちた。

喉が熱くなって、返事すらままならない。

でも——答えないわけにはいかない。

「.....はい.....っ.....お願いします.....っ、牝牛に、挿れてください.....っ」

彼は少しだけ笑う。

優しい声。でも、目は意地悪で、奥の奥まで見透かしている。

「ふうん。ちゃんと"牝牛"って言えるようになったんだ」

「.....っ.....恥ずかしい.....です.....でも.....」

「でも？」

「.....挿れてほしくて.....」

「ほら、もう頭使ってないじゃん。腰が欲しがってるの、声に出てるよ？」

「"理性のない牝牛"って、自分で実況してごらん？」

「.....っ、わたし.....理性なくて.....っ、腰が勝手に動いて.....っ」

「牝牛として.....挿れてほしくてたまらない、だらしのない身体してます.....っ」

「うん、合格」

彼の指が、優香の濡れた足の間に触れる。

入れられる、その直前——

「ねえ、ちゃんと感謝してる？」

「"こんな姿にさせてくれてありがとうございます"って、言ってみなよ」

「.....っ、ありがと.....うございます.....っ.....」

「牝牛にしてくださって.....イかせてくれなくて.....いっぱい焦らしてくれて.....ありがとうございます.....っ」

「そう。牝牛は、焦らされるほど悦ぶんだよね？」

「.....はい.....」

「イかせてもらえないたびに、どんどん感じるように調教されて――」

「“鳴きながら感謝してるうちに、乳首が疼きはじめるメス”になったんだよね？」

「.....はいっ.....！」

「じゃあ今から挿れてあげる。牝牛の中に」

「でも――“言葉で支配されたままイける身体か”、ちゃんと証明して？」

優香の目が、涙ににじむ。

快感より、命令されていることに興奮してしまう自分が、
彼に――見抜かれている。

「あなたの言葉で.....イきます.....っ」

「命令されないと.....もうイけない身体になりました.....っ.....」

「うん、じゃあ――今度こそ、挿れてあげるよ。俺の“牝牛”として」